

総括報告書

馬場 一男
坂上 正道

各分担研究者の研究と、班総会並びにワークショップの討議を通じて、本年度に、本研究班全体として合意に達した事項、新に解明された事実並びに今後に残された問題点を、本研究の最終目的である診断基準ならびに予防指針の作製に即して、総合班において取りまとめた結果を要約して総括報告書とする。

1. 用語及び定義

(1) 乳幼児突然死症候群 (sudden infant death syndrome, SIDS と略記)

- ① それまでの健康状態および既往歴から、その死亡が予測出来なかった乳幼児に、突然の死をもたらした症候群 (広義)。
- ② それまでの健康状態および既往歴からは、全く予測出来ずしかも剖検によってもその原因が不詳である、乳幼児に突然の死をもたらした症候群 (狭義)。

(2) 未然型乳幼児突然死症候群 (abortive SIDS)

それまでの健康状態および既往歴から、その発生が予測出来なかった乳幼児が、突然の死亡をもたらし得るような徐脈、不整脈、無呼吸、チアノーゼなどの状態で発見され、死に至らなかった症例。

これらの定義が、将来、訂正される可能性もあり得るという含みを残して、分担研究者、研究協力者全員によるワークショップで採択された。

なお、患児の年齢については厳格な制限は行わなかったが、取りあえず、「2週以後2年未満」を中核として研究し、この年齢制限を逸脱する例は、年齢を明記して別に報告することを申し合せた。

なお、未然型乳幼児突然死症候群については、欧米では、near miss SIDS, near miss baby, near miss case などの用語が用いられることがあるが、これは一般の誤解を招きやすい呼称であるので、英語の abortive SIDS の訳語を本病態の呼称に選んだ。この際、米国の National SIDS Foundation の勧奨する infantile apnea や、文学的表現ある Ondine 症候群なども考慮されたが、多数意見である未然型乳幼児突然死症候群が採択された。

ただし欧文発表では near miss SIDS の記載も妨げないこととした。

2. 広義のSIDSの分類

前述の定義における広義の乳幼児突然死症候群(SIDS)は、原因および既往歴によって下記のように分類する。

(1)死因による分類

- | | |
|----------|--------|
| ①狭義のSIDS | ⑥内分泌疾患 |
| ②心疾患 | ⑦代謝性疾患 |
| ③呼吸器疾患 | ⑧感染症 |
| ④神経疾患 | ⑨不詳 |
| ⑤窒息 | ⑩その他 |

(2)既往歴による分類

- ①全く死亡の予測される疾患の既往歴のないもの。
- ②疾患の既往歴はあるが、その疾患からは、突然の死亡は予測されないもの。

なお、この分類についても、定義と同様に、将来改訂される含みを残して、分担研究者並びに研究協力者の合意を得た。

3. 診断基準

上記の定義および分類は、そのまま、疾病分類もしくは疫学調査のための診断基準と見なすことも出来るが、剖検に際しての法医学的もしくは病理学的診断基準に関しては、最終的結論を得るに至らなかった。

しかし、疫学的、法医学的、病理学的研究や症例検討の過程で、乳汁吸引、鼻孔閉塞、間質性肺炎などの病変を、死因との関連において如何に評価すべきかという点に大きな問題のあることが明かにされた。

このことは、次年度以後に予定されている剖検的診断基準の起草にあたって、討議もしくは考察の焦点を示したものとして、有意義な成果と考えられた。

4. 予防指針

予防指針の作製にあたっては、疫学的調査の結果をふまえて、病因、病態を解明し、予測や早期発見の手段を工夫すべきことはあらためてことわるまでもない。

そこで本年度は、次年度以後に予定される予防指針の起案にそなえて、疫学的、病態生理学的な研究を行い、幾つかの重要な事実を明かにすることが出来た。

疫学的調査の結果では、SIDSの症例が月齢4カ月を中心とする年齢層に集中していること、またその発生が睡眠中に多く、発生時刻が午前中に多いことが明かにされた。

SIDSの病因および発生機転については、循環器疾患、内分泌疾患などの一次的もしくは二次的死因としての重要性が指摘され、また、睡眠中の徐脈や無呼吸の発生機転に関する病態生理学的研究が行われた。

さらに、SIDSの発生を予測する問題に関連して、呼吸周期の規則性を定量化することが試みられた。不規則な呼吸を営む者にSIDSが起りやすいことは、ほぼ定説となっており、これによって臨床的予測も可能となるものと考えられたからである。

また、睡眠時無呼吸の神経生理学的研究の結果では、聴性脳幹反応のパターンが、未然型SIDSでは正常児と著しく異なることが明かにされた。

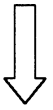
このような所見に加えて、不整脈、QT(U)延長のような循環器症状を勘案すれば、SIDSや未然型SIDSの発生を事前に予知することは必ずしも不可能ではないと思われる。

以上の研究のほか、SIDSについてのハイリスク児のスクリーニングに関連して、ハイリスク児をふるい分けるためのスコアリング・システムの導入も示唆された。

これらの研究は、ようやく緒に付いたばかりではあるが、将来予定されている予防指針の作製のために、重要な基礎的情報を提供したものとする。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



(1)乳幼児突然死症候群(sudden infant death syndrome,SIDS と略記)

それまでの健康状態および既往歴から、その死亡が予測出来なかった乳幼児に、突然の死をもたらした症候群(広義)。

それまでの健康状態および既往歴からは、全く予測出来ずしかも剖検によってもその原因が不詳である、乳幼児に突然の死をもたらした症候群(狭義)。

(2)未熟型乳幼児突然死症候群(abortive SIDS)

それまでの健康状態および既往歴から、その発生が予測出来なかった乳幼児が、突然の死亡をもたらし得るような徐脈、不整脈、無呼吸、チアノーゼなどの状態で発見され、死に至らなかった症例。